

艦これ×触手CG集

いむや  
伊168、触沈



今日も、オリョール海へ来ている。日課の資源集め。

今日で20連動目。さすがにイムヤもみんなも頭にきていたから、昨晚司令官を説得した。

「もう19日休み無しなんて、あんまりなの、休みをくれなければ、もうカレー作ってあげないんだから！」

カレーはよっぽど痛手だったのか、司令官はそう言われると頭を抱え

「あと1日だけ、いつてほしい」

そういつて、休みをくれることを約束してくれた。

「やったー！今日も大量大量！今日はこの辺にしましょう、明日からおやすみだよ！」

「有給？そんなもの都市伝説でち」

ゴージャはこのところ荒んでいる。

「そうやって期待させといて……ここによこよ」

イムヤはそんなことより、夕暮れに染まり始めた海の方こうを見ながら、司令官のことを思い出した。

「司令官、お腹すかせてないかな」

おやすみをくれるっていつたんだから、いいわ、約束通りカレー、作ってあげるんだから。

その時、海面に水柱が上がった！

「やばっ、まさか、敵襲ー？」

敵の位置がわからない、複数箇所から狙われているらしい。

「イムヤ、後ろ、おらわれてるでち！」

慌てて急旋回して爆雷を避ける、激しい轟音に包まれ、誰がどこにいるのかがわからない。気がついたらみんなバラバラになっていた。

「みんな、どこ？」

背後に気配を感じ振り返ると、爆雷が迫ってきていた！  
避けられない！

思わず目をつぶる。

しかし一向に爆発しない、不発だったのだろうか。  
恐る恐る爆雷があった方向を目視する。

そこには、砲弾を覆っていた金属片が漂っていた、やっぱり爆発したんだ。  
でも、普通の爆弾じゃない！



その時、なにかに足元を掴まれた！  
「なっ、なに!?」

爆雷があつたところから、なにやら腕のようなものが伸びてきており、  
イムヤの膝に巻つこうとしている。



足に取り付いたそいつは、少しずつイムヤを引きずり込む。

生暖かいものが足元からジツトリと絡みついてくる。

まるでそいつは大きな舌のように、足の指と指のまで、執拗に舐め回してくる。



「やだっ、気持ち悪い」

そいつに魅をなでられ、不快感がぞわっと全身をかける。



触手はしばらく舐め回していたが、脇の下や股のしたの水着の淵をなぞり始めた。

こいつ入ってこようとしている……



「えーのちよつといやっ」

抵抗しようと足をばたつかせる。

「やむい、なか入っちゃう」

触手をつかみだそうとするが、ぬめってなかなかつかむことができない。  
掴んでもつかんでも、ズルリと入り込んでいく。





スグ水の中に入り込んだ触手が、もぞもぞと水着のなかで蠢く。  
こいつ、一体なにをする気なのだろう。

全身をぬるぬると舐め回す不快感をひたすら堪える。





「ひゃっ、あんまり……乳首……弄らないで、んっ……」

ひとしきり舐め回すと、  
触手は次第に敏感なところにあたるようになった

触手は、こんどは股布のあたりに入り込んでくると、  
ゆっくり内部を擦り始めた

触手の表面はつぶつぶとした突起が無数についている、  
粘液で満たされたその表面が前の穴の淵と豆を小刻みに刺激する



「いやだ、そんなところ、こすっちゃダメっ……んっ」  
最初は気持ちかわるいただけだったのに、  
だんだん頭のなかが真っ白になっていく感じがする。

手足がしびれ、膝の奥底からなにかがこみあがつてくる。

「いやっ、なんかきちゃう」

「んっ、んっ……」

やむい

おしっこが漏れちゃいそうな感じがする。

我慢しようとするけれど、どうしても抑えられない、  
そのまま、溢れ出ちゃう、我慢できずそこから吹き出す。

全身を快感が駆け抜ける。

思わず漏れそうになる声を必死に抑えながら  
溢れつつける快感に耐える。



いまのはなんだったのだろう。

まだ全身には倦怠感と、あの感覚の余韻がながれ、  
全身があそこになってしまったように敏感になっている。



逃げなくっちゃ...でも、躰がうまうまうごかせない。

ほんやりとした意識のなかで、また触手が動き始めたのが視界の端に映った。



そいつは、また新しい足をだしてきて、見せつけるようにイムヤの前に突き出した。  
これまでの触手と違い、血管が浮き出た太く雄々しい腕だった。

「お、お、お」





「なによこれ、これをどうするつもり？」  
いやな予感がした。

逃げようと体をよじるが、手足を押しさえつけられていて動けない。



「いやだ、そんなもの近づけないで！」

その立派な腕が、ゆっくりとイムヤの股布につか付いてくる。それが割れ目に触れると思わず声が漏れる。

「イムヤ、入れようとしな……っ！」

先端がイムヤの穴へすこしずつ、だんだん強く押し付けられる。

「うそーやだ、はいつて〜りゅ〜」

そいつは無理やりねじ込んできた！



「痛い、奥までみっちり押し込まれてる」

膣内の先端まで触手が入り込む、触手は固く勃起し熱い。

「抜いてよ、膣内の形が変わっちゃってる」

「触手の形になっちゃってるよ」



触手はゆっくと動き出す。

最初は激痛が走ったが、  
触手のカカリが膣内のピタをテンポ良く刺激すると、  
またあの快感がこみあがつてきそうになる。



「うっ、なに」

触手は今度は頭を押さえつけ、がっちりといムヤの頭部を固定する。



触手が無理やりイムヤの唇をこじ開け、口の中に舌を押し込む。  
触手の舌がイムヤの舌を絡め取る。ぬめぬめした生ぐさい舌がイムヤの口の中をいつばいにする。

「ぐっつき、気持ち悪いよお」

得体の知らない化け物の舌に無理やりペロチューされちゃってる！



ブラシのような形状のものがイムヤの乳首を騷り始める。  
乳首がびんびんに勃起し、ちよつと突かれただけでも声がでるぐらい敏感になる。



「離してよ…気持ち悪い…やめて」  
乳首と口を触手が責めつつける。

ぐちゅぐちゅと粘液の音が周囲にこだまする。





あんなに気持ちが悪かったのに、だんだん股間が熱くなってくる。

「まさかあたし、こんなのに感じちゃってる」

思わず、膣がキュッとしまる。  
触手は二層激しく動きだし、膣内で暴れる。  
「あっ、だめ、イッチャう」




「いや、化け物なんかに孕まされるなんて、いやっ」

その時、膣内の触手がどくんどくと動き、なにかがこみ上げてくる感触が走る。

「アイヤッ」

全身がビクビクと痙攣し手足がピンと張りつめて震え、頭が真っ白になる。化け物の先端から粘液が溢れ出る、熱いネバネバした粘液がお腹のなかに広がるのを感じた。





ひとしきり出し切ると、化け物は膣内から触手を引き抜いた。  
引き抜かれると、お腹のなかから化け物の粘液がどろりと垂れだした。

「んっ…」

股間に手を添えると、溢れ出る粘液が手を伝い糸を引いた。

「やられちゃったよ、司令官」

「化け物に種付けされちゃった…」



それから数時間、化け物からの執拗な責めが続いた。



「んっ、んああん」

繰り返し襲ってくるオーガスムに浸り続ける。

「あん、またきちやう、……イクッ……」

体も、もはや苦痛は感じなくなっていた、逃げようとも思わなくなっていた。

もうこの気持ち良さから、離れることはできない。快楽に抗うことができない。躰になっていた。





ふと司令官のことを思い出した。

「司令官…カレ、もう一緒に作れなくなっちゃうね」

「司令官、ごめんね」

